

薬物依存症者に対する新たな回復支援プログラム「TC エンカウンター・グループ」の
普及に向けたワークブックの開発

—経験的知識・技術の言語化におけるエピソードの役割について—

○ 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所（日本学術振興会特別研究員 RPD） 引土 絵未（7570）

キーワード：エンカウンター・グループ，経験的知識・技術，エピソード

1. 研究目的

治療共同体（Therapeutic community: TC）モデルは、伝統的医学モデルのオルタナティブであり、依存症当事者のセルフヘルプ機能を中核としている。エンカウンター・グループ（EG）は、治療共同体モデルにおける象徴的なグループの一つであり、メンバー間のフィードバックを基盤に多様な視点からの気づきを促すと同時に、グループに共通する課題を解決することを目的としている。つまり、「当事者性」を技術にすることで効果をもたらすグループの手法であると言える。

日本国内では、物質使用障害専門治療機関の乏しい状況において、薬物依存症当事者による社会復帰施設ダルクがその役割を一手に担ってきた。しかし、近年では、依存症を取り巻く環境が多様化し、当事者コミュニティゆえの困難を抱える中で、新たな回復支援プログラムを求める動きがみられるようになった。そこで、本研究では、ダルクにおいて 2013 年より EG の導入を試み、また、効果検証において一定の効果が明らかになった（引土ら 2015；2016）。これらのグループの効果を実感した当事者たちによってグループは広がりを見せ、現在では 7 施設で展開されている。しかしながら、地理的条件からグループ経験者との交流が困難な施設では効果が認められない部分が明らかとなり、グループワークスキルの定着が課題であることが推察された。このような背景から、グループの機能を維持・継続していくために、従来の経験的知識・技術に依拠した方法だけでなく、補助的教材の開発が必要であると考えた。本研究の目的は、民間回復施設において EG の維持・継続を支援するワークブックを開発することにある。

2. 研究の視点および方法

ワークブック作成に際して、EG 従事者などの専門職・研究者・実践者などによる治療共同体研究会参加者計 26 名に対して実施したグループインタビュー（計 6 回）について質的分析を実施し、EG スタッフガイド基礎項目を構成した。これらの基礎項目について、デルファイ法を援用し、EG 従事者 15 名に各項目の重要度に関して、「非常に重要」から「全く重要でない」の 5 件法による質問紙調査を実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づくとともに、国立精神・神経医

療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

質的分析の結果、6つの大カテゴリーと26のカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリーから作成されたEGスタッフガイド基礎項目（31項目）について、「非常に重要」と「重要」の回答率合計が80%以上の項目について、スタッフガイド項目とした。

5. 考察

EGを実施するうえで重要となる姿勢や態度などについて実践者の経験的知識・技術について質的方法を用いて概念化した。しかし、これらの概念と実際の経験的知識・技術には距離が生じており、概念がより実践的に理解されることを目的にエピソードを導入することを試みた。なお、エピソードについては、当事者から同意を得て記載した。以下に概念とエピソードを例示する。

概念：「グループでは誰も主導権をもちません。（後略）」

テーマ：現在の生きづらさに影響を与えている過去の出来事について

参加者質問「今の生きづらさに影響を与えている過去の出来事やエピソードは何か浮かびますか？」

答え「父親がアルコールが原因で倒れて入院したことがあった。目が覚めた時に、声をかけると『〇〇さんですよね、お世話になってます』と言われた。ただ、自分を息子として認めてほしかった。いつも大人のように頑張らないといけなかったから、子どもでいたかった」

ファシリテーター質問「今日の前にそのころの自分がいるとしたら、なんと声をかけてあげたいですか？」

答え「『遊びに行っておいでよ』といいたいですね」

ファシリテーター質問「では、大人のように頑張っていた時の自分が、言いたかったことはどんなことですか？」

答え「・・・（沈黙）。『ごめんなさい』ですかね」

【解釈】

「言いたかったことは？」と聞いたときに、ファシリテーターは、「甘えさせてほしい」とか「話をきいて」とかそんな気持ちが出てくることを想定していた。そして、それがグループの落としどころになると考えていた。しかし、そこに出てきたのは、まったく想定していなかった「ごめんなさい」だった。この気持ちが出てきたときに、とても驚いた。ファシリテーターにはない感情だった。そして、続きの質問は周囲に委ねていた。実際は質問が浮かばなかったのだが、後になって振り返ると、これが、主導権を持たないということだと感じた。

エピソードを介することで、「誰も主導権をもたない」という概念は、ファシリテーターの経験を通して、共感的に理解することが可能になると考える。この「共感性」がエピソードを用いる際の大きな産物であり、エピソードが機能的に活用されるための重要な評価軸であると考えられる。

【本研究は科学研究費助成事業（特別研究員奨励費）（課題番号：26・40189）の助成を受けて実施した。】